

## 菊池一族

菊池一族は、日本の中世において九州で重要な政治的役割を果たした有力な武士集団です。一時は全国に政治に影響を及ぼすほどの勢力を誇りました。一族の本拠地である城下町・隈府（現在の菊池市中心部）には、菊池氏が敵対する武將に滅ぼされてから数世紀経った今でも、500年に及ぶ歴史の遺産が色濃く残されています。

菊池氏はどこから来たのか？

菊池一族がいつ、どのようにして成立したのか、詳細の多くは歴史から失われてしまいましたが、その成立は1070年と考えられています。この年、九州の行政の中心地であった大宰府（現在の福岡県中西部）に赴任していた高官、則隆が現在の菊池地方に到着したと考えられています。則隆は菊池姓を名乗り、後に菊池川となる川沿いに屋敷を構え、城下町・隈府の基礎を築きました。

僻地にあったものの、菊池地方は稲作が盛んな農業地帯でした。則隆とその子孫たちは菊池川での交易を独占し、周辺の平野部で栽培された作物を販売することで富を得ていました。このような平野部は、菊池一族が日本有数の農地へと発展させたものでした。

認められざる立場

則隆の時代から約100年後の12世紀後半、菊池氏は日本の歴史の新しい時代を切り開く争いに巻き込まれます。源平合戦（1180-1185）では、長らく朝廷の覇権を争ってきた平氏と源氏の武家が、天下の支配権をめぐる争いをしました。全国の武家はどちらかに付かざるを得ず、菊池氏は当初源氏を支持していましたが、戦いの最終段階では、主に九州の武士で構成され、苦境に立たされていた平氏軍と同盟を結びました。

源平合戦は源氏が勝利し、源氏はその後、日本初の武家政権である鎌倉幕府を設立しました。鎌倉幕府は東日本を本拠地とし、同じ地域の勢力を後ろ盾として、かつての敵であった菊池氏をはじめとする九州の諸氏を疑いの目で見っていました。

菊池氏と幕府の間の不信は長引き、13世紀後半にはさらに悪化しました。朝鮮を征服したモンゴル皇帝のフビライ・ハンは、1274年と1281年に日本への侵攻を開始。日本の武士たちは侵略

者を撃退するために、派閥の忠誠を捨てて戦いました。菊池氏も幕府のために複数回にわたって戦い、モンゴル軍の放逐に貢献しました。当時の当主であった菊池武房（1245-1285）は、戦場での勇猛さで称賛されました。しかし、侵略者に勝利した後、菊池一族は幕府が褒賞品で彼らに報いなかったことに不満を抱きました。

## 脚光を浴びて

14世紀初頭、鎌倉幕府の支配力は弱まっています。幕府は外敵から日本を防衛するために資源を費やす一方で、地方の武将と朝廷を統制する難しさに直面していました。特に朝廷との対立は最も大きな困難となって降りかかってきました。後醍醐天皇（1288-1339）が朝廷に権力を取り戻す機会をうかがっていたのです。

後醍醐天皇は、菊池氏を含む幕府に不満を持つ武家と同盟を結び、1331年に反乱を起こしました。1333年、菊池氏は他の九州の武士団とともに、幕府の出先機関がある博多（現在の福岡県福岡市）を攻撃しました。しかしその矢先、菊池一族は同盟を組んだはずの武士に裏切られてしまいます。多勢に無勢で死を覚悟した当主・菊池武時（1292-1333）は、息子の武重（1307-1341）に菊池に戻るよう命じ、幕府軍に決死の突撃を仕掛けました。

武時とその部下たちは戦死しましたが、彼らの大義は勝利しました。菊池一族の博多攻めの失敗からわずか数ヶ月後、鎌倉幕府は後醍醐天皇側の軍勢に滅ぼされ、幕府は廃止されました。勝利した天皇は菊池氏の忠誠に報いるため、武重を肥後国（現在の熊本県）守護（地域の治安維持を守る地方官のこと。現在の県知事のようなもの）に任命しました。菊池氏はこの名誉ある役職を約200年間務めました。

## 南朝の忠臣たち

後醍醐天皇が朝廷による直接統治を復活させようとした努力は、長くは続きませんでした。後醍醐天皇の改革は、鎌倉時代以前の貴族社会と政治体制への回帰を目指したものでしたが、この政策は武士階級の大部分を敵に回すこととなりました。鎌倉幕府が倒れてからわずか3年後の1336年、かつての鎌倉幕府の武将で後醍醐天皇の盟友であった足利尊氏（1305-1358）が京都を占領し、新たな武家政権である足利幕府を創設しました。

尊氏は自分の意のままに新しい天皇である光明天皇を立て、後醍醐天皇は都から逃がれ、京都の南、現在の奈良に近い吉野で対立する朝廷を作りました。この出来事から南北朝時代（足利尊氏側が北朝、後醍醐天皇が南朝）が始まり、対立する二つの朝廷が国の支配権をめぐる争いになりました。

菊池氏は九州の他の多くの武家と同様に、南朝に忠誠を誓いました。後醍醐天皇は、九州の支持者を天下奪還の鍵と考え、幼い皇子、懐良（かねなが）親王（「かねよし」とも読む；1329-1383）を九州に派遣しました。その狙いは、既存の同盟関係を強化し、新たな同盟関係を築くことにありました。

懐良は1348年に隈府に到着し、城主の菊池武光（1319-1373）と対面。この出会いが、菊池氏最大の繁栄期の幕開けとなりました。それからの10年間、懐良と武光は九州を拠点とする武家との強力な同盟関係を築き上げ、九州全土で北朝派を押し返しました。彼らの勝利は、有名な筑後川の戦い（1359年）で頂点に達し、菊池氏は北朝方の大軍を決定的に破りました。翌年末までに、菊池氏率いる南朝方の支持者は九州全域を支配するようになり、同盟の本部は、太宰府に移されました。300年ほど前、菊池氏の創設者である則隆が、菊池（熊本県）に向けて旅立つ前に赴任していた場所に、再び戻るようになったのでした。

戦いでの勝利後、菊池一族は守りを固めましたが、南朝からの要請が災いを招くことになります。それは勝利した九州の武士に、吉野を訪問するよう命じるものでした。菊池武光が率いる艦隊は九州から出帆しましたが、北朝軍に迎撃され敗走、武光は太宰府に戻りましたが、足利幕府は九州の脅威に対処するために、戦略家として名高い今川了俊（1326-1420）を、新たな軍将として派遣しました。

了俊は1372年に菊池氏率いる南朝軍を太宰府から追放し、翌年の武光の死は菊池氏にさらなる打撃を与えました。最強の将軍を失った懐良公率いる南朝軍は、九州の奥深くまで追い詰められました。1383年に懐良が死ぬと、南朝方の抵抗は終わりを告げ、菊池氏は再び祖先の土地である隈府周辺に閉じこもることになりました。

#### 政治から一転、文化振興へ

1392年、苦戦を強いられていた南朝方は敗北を喫しました。勝利を確信した足利幕府は、弱体化した菊池氏に引き続き肥後国の守護職を任せましたが、一族の征服と栄光の時代は終わりを告

げました。

その後、隈府城主である菊池氏は幕府との関係を修復し、一時は、一族の当主が肥後国と隣接する筑後国（現在の福岡県南部）の守護に任命されるほど幕府の好意を得ました。しかし、菊池一族は政治的野心よりも、文化の発展に目を向けました。第 20 代当主の菊池為邦（1430-1488）と息子の重朝（1449-1493）は武士や町人の教育機会を拡大し、彼らの知的・精神的探求を奨励しました。彼らの指導の下、菊池は仏教や儒教の学問の中心地となりました。

### 衰退と没落

菊池一族の平和的探求は、日本国内が武士団の対立で内乱状態に陥ったことによって覆されることとなりました。15 世紀後半には、足利幕府は地方の武將を中心とした勢力の台頭によって弱体化し、支配力を失いつつありました。小規模ではありましたが、同様の動きが菊池でも起こっていました。長らく菊池氏に仕えてきた家臣一族が主人を追い出し、当主の座を奪おうと試みたのです。

1504 年、これらの武士は菊池家当主を倒し、家老（家老とは大名<広い領地を保有する武士>に仕える重臣のこと）の一人を当主にしました。1500 年代半ば、菊池氏は残りの領地をライバルである大友氏に奪われます。そして 1554 年、最後の当主であった菊池義武が死去し、菊池氏の家系は消滅しました。

### 再評価

1800 年代に入ると、地元の歴史や過去の栄光への関心が高まり、菊池一族が再び注目されるようになります。商人や地主など、菊池に住む裕福な人々が、一族ゆかりの碑や墓の修復、再建に資金を提供しました。

全国規模で菊池一族の功績が再評価されるようになったのは、1868 年の明治維新の後のことでした。明治維新により天皇の政治的支配権が回復し、約 7 世紀にわたる武家支配が終わりました。明治天皇（1852-1912）の新政府は、14 世紀の南朝の天皇が皇位の正当な保持者であるとし、南朝の盟主であった菊池一族は、新体制下で期待される君主への忠誠の模範として取り上げられました。主要な菊池家当主たち（第 12 代菊池武時、第 13 代武重、第 15 代武光）は、隈府にあった一族の居城跡に新しく建てられた、菊池神社の祭神として祀られました。